



小説 空蝉

挿絵 海原圭哉

立ち読み版

序章

第一章

淫惑の戦士

第二章

淫乱の血

第三章

浸食

第四章

饗宴

終章

006

019

084

117

175

252

登場人物紹介

Characters



鈴木清音 / レディシャドウ

黒衣の巫女レディシャドウに変身して人造人間と戦う美女。普段は神社で巫女として暮らしている。エネルギーは異性の体液。

ソニア・ルーヴェンス / レディヴラッド

清音の姉。ナース姿の戦闘服を纏い、レディヴラッドに変身する。妹とは対照的に享乐的な性格で、常に男たちを挑発する。

ドクター蘭

生体テロ組織アウグストゥスの女科学者。自分の楽しみそのままに人造人間を作り出しては、破壊と肉欲に溺れることを信条とする。

美浦崇文

アウグストゥスの実験台にされていたところを、清音たちに救い出された孤児。清音のパートナーとなり、エネルギー供給を行う。

美浦快

崇文の実弟。兄と同じく清音たちに救い出されたあと、ソニアのパートナーとなる。気弱な美少年。

「さあ。その可愛く震えるお口で、私のカチカチおちんぼを啜えて頂戴」

そう告げる蘭の目が、倒れ込んだ崇文を見据えている。強化改造を重ね、娘たち以上の実力を持つこの女科学者ならば、指を捻るだけで苦もなく彼を殺せるだろう。

清音は、もはや二度と逃げ出せない蜘蛛の巣に擲めとられてしまったことを実感した。

「卑怯者、卑怯者、卑怯者おッ！」

叫ぶ清音の拳はきつく握り締めすぎたせいで爪が肉に食い込み、血が滲んでいる。強い意志を秘めた瞳こそ死んではいけないものの、元より残された道は服従することだけ。一度刷り込まれた奴隷の精神は、そう簡単に消え去ってくれたりなどしなかった。

「ふふ、そうね。貴方を手に入れるためだったら私、なんでもするわ」

片や、敗北感に打ちひしがれる娘を満面の笑みで見つめる女科学者。支配する悦びに浸る股間で肉棒がブルリと震え、精囊で隠れた秘裂からはきらめく愛液が太腿を伝い流れ落ちていた。母と娘の間にかつてあった関係。完全なる支配関係がここに復活する。

「うう、く、臭い……ッ」

鼻先に突きつけられた肉棒から漂う悪臭に、清音が顔をしかめる。よくよく観察してみれば、カリの辺りに崇文が取りきれなかった恥垢がたんまりとこびりついていていた。

「貴方を見つけてからこっち洗わないでおいたのよ？ ああ坊やの唾液の味と絡まって、我ながらとんでもない匂いよねエ。全部、清音ちゃんの舌で隅々まで綺麗にするの」

グリグリと清音の整った鼻梁に肉棒が押しつけられる。先走りの汁と剥がれた恥垢とが

顔にヌメる筋を幾本も擦りつけた。

「さあ、手を根元に添えて……そう、そのままお口に咥えるの。まずは、唇で先つちよの
カリだけを刺激して頂戴。……あと、巫女装束は脱がないでそのままね」

（こんなに脈打って悦んでる……なんて下卑た女なの？ くそっ……）

要求をすべて呑み、母である美熟女に傳く。足元に跪き、少しでも主人の興奮を煽ろう
と胸元の装備を自ら取り去って乳房を露出させた。

雄々しく脈打ち続ける肉棒に恐る手を伸ばし、その下のシワだらけの袋をやわやわ
と掌で揉み込む。トロトロと零れる母の愛液が清音の掌を濡らしてヌチャヌチャと卑猥な
音を奏で始めると、いよいよ蘭の顔は嗜虐に染まり昂ぶっていく。

「覚えていてくれたのね……んふアッ、私の好きなトコロお。そう、そこ……あつ、ああ
んッ！ タマタマが感じるのお」

——こんなモノ、握りつぶしてやろうか。

そんな考えが心を掠めたのも、束の間のこと。徐々に充満し始めた牡の匂いに、清音の
頭はすぐさま蕩けさせられてしまう。気がつけば亀頭を舌が舐め這っていた。

「ちゅぽ、んぶうつ、ちゅううつ……ずじゅじゅううつ！」

（柔らかくてしわしわで……変な味……）

いつもの、崇文のものとは少し違う。甘味のある牝の体臭に入り交じる苦味。淫乱に造
られた肉体を呼び覚ます、牡の味。

「ふあつ、あ、アハ、懐かしいでしょう、ママのおちんちんの味イ」

（そんな……でも、でもこれ……懐かしくて……。それに、とつても美味しい）

もう蘭の声など耳に入っていないなかった。耳にかかる髪を払い除けながら、一心不乱に肉棒を吸う。玉袋の全体を口に含んで睾丸を舌でコロコロ転がしてみせる。

「くん……そろそろおちんちんぼも舐めて頂戴よオ……ッ」

昂ぶりが限界を超えたのか、蘭が両手で清音の頭を掴んだ。強引にエラの張る亀頭の前まで引き上げられ、本人の意志を確認せぬまま尿道口へのキスを強要される。

（うう……これにっ、このおちんちんに抗えない……ッ！ 我慢できないよお！）

口内に広がる独特の匂いと味。母の腰に生えているのは、まぎれもなく牡の性能を備え持った、本物の男性器だ。知らず知らずのうちに口が開く。

待ち構えるように大きく開いた口腔へ照準を合わせ、蘭が思い切り腰を突き出す。

「んぼっ、ぼぐううううううううっ！ んっ、んんむううううっ！」

予想していた大きさを上回る肉勃起に、口腔が強引にこじ開けられる。容赦なく喉奥を突かれ、一旦引き抜いて肉幹の太さを見せつけられる。今度は奥には決して突き込むことなく、唇の裏や頬の内側を丹念に擦りたててきた。

「相変わらず喉も小ぶりできついわねえ。……ンフッ、そう……いいわア」

女科学者の顔色を窺いながら、きゅっきゅっとりズミカルにカリ首を搾る。そのたびに漏れ出る汁を、貪欲に飲み下した。

素早いピストンで唇を行き来する肉棒に、自然分泌された唾液を舌を器用に使いまわしていく。絡めた舌は傘高のカロの裏側に貼りつかせ、唇を窄めて歯があたるのを防ぐと同時に肉の幹部分を締めつけた。

口腔を思う様に犯す肉棒は、最初に喉奥に突き入れたあとは入り口付近で龟头部分のみをたっぷりの唾液で湿る口内に浸し、小刻みに前後運動を繰り返している。自然、清音は舌を大きく突き出し、頬を窄めて口をぼっかりと開けた淫猥な表情を形作った。

——もつと、奥に欲しい……。

始めの一撃がなまじ強烈だっただけに、じつくりと高まっていくような蘭の動きが物足りなく感じられる。強引に口腔を押し割られているはずなのに、逆に焦らされているような錯覚を感じてしまっていた。

「奥、突いて欲しいのかしら、清音ちゃん？」

「んっ、んぐううっ!？」

勘の鋭い女科学者は目ざとく清音の表情の変化を読み取り、心の内をずばり当ててみせる。憶測で言っているのではない。剛棒を突き入れた体温の変化や筋肉の微妙な動き、瞳に見られる動揺の色。そういった事柄からの確に推察、検証のうえで舌に乗せているのだ。

色欲に堕ちている最中でも、決して油断ならない女——それが目の前の女。人類史上稀に見る悪魔的頭脳と強化し尽くした身体能力、そして男なら誰もが欲情せずにはられない美肢体を併せ持つ魔性の牝、ドクター蘭。清音の口腔を遠慮なく犯しぬく今現在も、その

頭脳は一分の隙も見せずにフル稼働を続けている。

「ウフフ。お股から涎が出てるわよオ」

（う、嘘よっ！ そんなはずない。無理矢理犯されてるのに、そんなのお……）

少し前からずっと感じていた身体の異変。グツグツ煮えたぎるような熱い塊が下腹の奥のほうで渦巻いている。牝の匂いを過敏に嗅ぎ取った身体が、牝の悦びを求め疼いている。母親のペニスに欲情しているという、目の背けようがない確かな事実。それを母自身から指摘され、清音は身も消え入らんばかりの羞恥を味わっていた。

「おちんぼ欲しいです、って声に出して言えたら、喉の奥にまでずっぼりしてあげるわ」
「い、いやあっ……」

唇は反射的に拒絶の声を上げた、しかし、心中ではまったく逆の思いが渦を巻いて女戦士の清廉な精神を苛んでいた。

（言えは……貰えるの？ 美味しい母様の、おちんぼ。喉でいっぱい味わえるっ……）

蘭の挑発に応えてはいけない。通常の精神状態なら、清音はそう判断したに違いなかった。だが廃工場からの戦闘続きでエネルギーを使いすぎたせいもあって、我慢できないほどの喉の渴きを感じている。牝の欲望の証、子種がたつぷり詰まった濃縮液を、身体が欲しがって啼いている――。

「我慢しないでいいのよオ。さあ、言っておしまいなさい」

「お……おちんぼ……欲しいっ。母様のおちんぼ汁っ……早く、奥まで突っ込んでえ！」

蘭の促しに応える形で、卑猥な台詞が口を突く。起死回生を図るため、精液をチャージしたら、すぐに崇文を連れて蘭の元を逃げればよい。とりあえずは体力の回復が先決だ。(ただ、それだけのことなんだから……)

エネルギーを得るためと心を無理矢理に納得させ、身体との折り合いをつける。心中の葛藤とは裏腹に清音の唇は忌み嫌っていた女を母と認め、浅ましいおねだりを口にした。

「物分かりのいい子は大好きよ。ご褒美をあげなくちゃ、ねッ！」

——ゲボオツツツ！

「ごぶ……ツツツ！ げえ、げぶッ、んぐぐうううううううううううツツツ！」

喉の奥をいきなり突き上げられ、驚いた胃から酸っぱい胃酸が込み上げてくる。けれど硬い肉棒で数度喉を小突かれるたびに甘い痺れがじんわり下腹の辺りに広がり、やがて苦痛は抗いがたい快樂へと変化する。それもこれも、精を欲しがるように仕組まれた淫靡で貪欲な肉体構造のせいなのだ。

「んぢゅっ、ぢゅぽおっ、ぷぶぷうっ！ ぷあ、はっ、あハア……」

常人ならば失神する痛苦にすら耐え、快樂には容易く陥落する。たとえ本人が望んでいなくとも、奴隷としてはこれ以上にならない素養を清音は生まれながらに備えていた。

「もっといやらしくしゃぶるのよ？ そうすれば、たくさん突きまくってあげるわ」

そしてそんな身体に清音を作りあげた張本人は、仁王立ちで腰をグイグイと娘の窄めた口腔へ押し込んでくる。屈強の女戦士を屈服させる悦楽に浸るその脳内では、今も続々と

拷問・色責め・言葉責めといった数々のアイデアが渦巻いて出番待ちをしているはずだ。

「んごっ……ぐぶぶっ！ んっ、んうううッ」

激しい抽送に、清音の口端から涎が零れ落ちる。トロみのある生暖かい液体は火照りで朱に染まる清音の胸元、その白く深い谷間へと垂れ落ちていった。

「清音ちゃんってば、下のお口だけじゃなく、上のお口でも涎を零してるのね。我が娘ながら、少しはしたなすぎではないかしらア？」

底なしのサディスティックな性欲は留まることを知らない。牝のエキスを貪欲に渴望する戦士の肉体には、あまりに不釣り合いな初心な少女の如き心根。それを、蘭は心ゆくまで颯り辱めて楽しむのだ。

「物凄い悦びようね、清音ちゃんのお股、もうビチョビチョよ？」

「い、言わないで……よお」

言われずとも自覚している。口内の先走りを飲んだだけで、擦りあわされる股から、胎の奥底からじわりと熱い汁が湧き出してくる。

（所詮私は卑しい牝なんだ……）

淫靡な身体から逃れることは叶わない。分かりきった事実にも、己を激しく蔑む。

「ほら、口を離さない！」

——ずぶううッ！

「んぼおおッ！ ぶああっ、んむうっ、んぢゅじゅううッ！」

頭を掴まれ、熱たぎる剛直が舌の上を滑って口内へと捻じ込まれる。無意識に清音は舌を括れたカりに絡めた。

(苦い……おちんちんのカスが溜まつてる……でも、それが美味しくて、堪らないのお) 舌の先にぶによりとした恥垢の感触。苦い味わいが胸いっぱい広がるのをこらえ、それを舐め取っては胃袋へと収める。いつしか無心で必死にその行為を繰り返していた。

「そんなに先っぽ舐められたらア……はアン、熱いのがきちゃう。くるウ……ッッッ！」
——どぶううううっ！ びゅっ、びゅばばばばあッ！ びぶっ！ びゅぶるるる！

「んぶっ、んぶううううううッ！」

蘭が絶頂の声を上げた直後、熱い飛沫が清音の喉奥で弾けた。むせ返りそうなほどの熱く濃厚な牡のエキス。清音の身体が渴きを訴えてまで欲した、待望の精液だ。

たとえ、嫌悪する相手の精であつてもエネルギー源には変わりない。戦士としてのエネルギーさえチャージできれば、この苦境からも脱出できるはず。そう考え、吐き出されて口内に溜まる精をゆつくりと飲み込もうとしていた。……だが。

「んぶ……ッッ!？」

激しく吐精しながらも蘭の腰は止まらない。激しく打ち込まれる腰はますます速まり、ぶちゅぶちゅと攪拌された精液が泡立って清音の口端から零れていく。

「あははははッ。まだまだ出るわ！ 全部残さずに飲むのよおッ！」

口腔内のいたる所——菌茎や頬の裏側といった部位に跳ね回る肉棒がぶち当たり、コッ

テリと濃い吐き出したての新たな精をなすりつける。

窒息しそうになる状態に、次々と濁液を飲み込んでいくことを強要される。戦士のエネルギー源である精液を、嫌々ながらも清音は喉を鳴らして飲み下し続けていた。

——じよぼっ、ちよろちよろ……。

「んっ、んぐうっ……つぶああッ！ イ、イヤァ——ッ!!」

突如口の中で広がる塩辛い味わい。精液ではない。

「おしっこ我慢できなくなっちゃった。アハ、立ちションって気持ちいいのねエ！」

精巧に作られた擬似ペニスには、排泄機能までが備えられていた。恍惚とした表情で蘭が娘の口内に放尿する。始めの奔流が舌の上に乗せられ、続いて慌てて口を離れた清音の鼻筋から口元にかけてのラインへと黄色い尿が弧を描いてひっかけられた。

「げぼっ……がぼおっ、や、やめてよおおッ」

「たまらない、たまらないわよ、その顔っ！ 泣きそうなのを必死にこらえてる顔に、おしっこひっかけられて……フフッ。また勃ってきちゃって、おちんぼが痛いわ！」

勃起したままでは放尿がしにくいのだろう。眉根を寄せてペニスを振りたくり、勢いの弱まった雫を飛ばす。飛び散った雫はすべて清音の顔へと降りかけられた。

「ほら……飲んで頂戴な」

「あ、ああ……いやあっ……。いやよおっ……んぶぶううううううっ!？」

ザーメンと小便でまみれながらも未だ硬度を保つ肉棒が、再度熱い口内へと突き込まれ



た。未だ続く長い小便を、無理矢理に喉へと叩きつけられる。

「んんぐぐぶうっ……ぐちゅぢゅぢゅうっ、んぐっ、ごく……ごくっ……！」

生暖かくなつた小便混じりの精液が口内をあつという間に満たし、鼻を摘まれておぞましい粘液を飲み込むことを強要される。息苦しきで開いた喉を濁液がどろりと滑り落ちる感覚に嫌悪を感じ、涙の滲む目尻をきゅつと閉じる。ぐちゅぐちゅと音を立てながら溢れかえる汚濁を懸命に飲み下した。

「たまらないわ……最高！ やっぱり清音ちゃんは最高の奴隷ね！」

内も外も小便と精液で穢され、牡の匂いでべつとりと顔中をコーティングされる。口も鼻も塞がれて、口腔内はむせ返るような匂いで一杯だ。

「うえっ……げほっ、げほげほ……。はっ、はあはあ。く、臭いっ……！」

「それじゃ、すっかり準備も整つたようだし……。そろそろ清音ちゃんのぬるぬるオマ○コに入れさせてもらおうかしらね？」

這いつくばって嗚咽する娘を一瞥し、母という立場にあるはずの女科学者はさらなる凌辱を要求する。大量の——常人の十回分以上の排泄汁で幹から袋まで全体をドロドロに濡れ光らせた肉棒は、衰えるどころかますます血をたぎらせて硬く隆起していた。

「ひっ、そ、それだけは……イ、イヤあ……！」

脅えきつた白濁まみれの顔を伏せて頭を抱え込み、肉棒から目を逸らすように身体を縮こまらせる。清音の内で、かつて蘭に刻まれた隷属の精神が目覚めてしまつていた。

「そう、そんなに嫌なの……。ウフ、それじゃあね——」
こうしましょう、と蘭が持ちかけた提案とは——。

「くっ……んんっ、こんな……こんなあ……ッ」

縛めを解かれぬまま自由にならぬ両手で、胎を上体で押さえるように前屈みの姿勢の清音が、もがいている。ベッドで微笑む女科学者を気丈に睨む瞳はまだ輝きを失ってはいなかったものの、その視線は頼りなく小刻みに震えてしまっていた。

「ほら。ちゃんと入ったか、ママに見せてごらんさいな」

足元の冷たい床には、ポタポタと滴る液体。近づいてきた蘭がおもむろに袴をめくる。

——ブウウウン。

露わになったスパッツの、盛り上がった黒い光沢の内側でなにか硬いものが蠢き、唸るような音を響かせていた。

「貴方のためだけにあつらえた特別製のバイブ、つけ心地は最高でしょう？ ラボに残ってたデータを元に、清音ちゃんのおマ○コの大きさに合わせて作ったんですもの」

薄めの恥毛を掻き分け、みっちりと膣内を隙間なく埋めていたのは、女科学者特製の擬似ペニス——まがまが禍々しい形状のバイブだ。

悪魔の如き天才科学者、ドクター蘭が娘である巫女戦士レディシャドウに嬉々として課した試練。股座に蘭の肉棒とサイズから色形までを似せた擬似男根を嵌め込んだままで、

一度も絶頂に達さずに一時間耐え抜くこと。それが叶えば美浦兄弟を解放し、清音たち姉妹にも蘭自身は今後一切手を出さない――。それが彼女が娘に示した対価だった。

「んっ……くう、は、はあっ……こ、こんなものおッ」

提示された時は破格の条件にも思えたが、子宮を絶え間なく突き上げる巨大バイブの振動は思った以上に厳しい。ただでさえ快楽に弱い肉体だ。並外れた精神力となけなしの体力で辛うじて立つてはいるものの、一時間もの間持ち堪えられる自信は正直ない。

「さあて、どうしようかしら？」

清音のすぐ隣で、地べたに全裸で寝そべる少年。気を失ったままの崇文の前で、蘭が行ったり来たりを繰り返す。ただなにをするでもなくそのあどけない寝顔と萎えたペニスを見比べては、何度も領きを繰り返す。その間も、絶え間なくバイブは機械とも思えぬ繊細な動きで膣内部の柔髪を擦り上げ、清音に悩ましい嬌声を漏れ出させていた。

「は、ああ……ひあ……ああん……」

いったい、どういうつもりなのか。焦らすだけ焦らしておいて、なにか企んでいるのかもしれない。相手の考えがまったく読めないだけに、清音の不安は増すばかりだった。

「やっぱり清音ちゃんに効果的なのは、こういうプレイよね？」

やがて蘭が立ち止まり、少年の身体をゆっくりと抱き上げた。自分の胸に寄りかからせるように立たせると、未だ意識のない崇文のペニスをやわやわと揉む。眠っている状態のペニスは当然勃起してはおらず、半ばまで皮を被った状態で縮こまっていた。

「シコシコ……シコシコ……フフッ、もう大きくなってきたわ。この子って相当なスケベよねえ。清音ちゃんも毎晩たっぷりとしてもらってるんでしょ？」

（やめて！ そんな話……やめてよつ！ 崇文君に触れないでっ……）

下世話な発言の間も、彼女の視線は崇文のペニスに釘付けだ。ねつとりとした蘭の視線で崇文のペニスが犯されている。それが清音にはなにより許せず、拘束が酷くもどかしい。「た、崇文君になにをするのよ！」

得体の知れない恐怖が清音を襲う。居ても立ってもいられなくなって声を荒げた。

「フフ、こうするのはどうかしらア」

蘭は一瞥だけをよこすと、これ見よがしに崇文のペニスを上下に扱きたてた。女科学者の熟練した指先に愛撫され、掌の中の肉棒はどんどんと体積を増していく。半勃起のペニスをギユギユウツと強く掴んで、蘭が卑猥に口元を歪めてみせる。

そして、悔しさとパイプから送られてくる悦楽の狭間で囁みする清音に新たな提案を持ちかけてきた。

「私がこの子のちんぽでイク間、ずっと我慢していられたなら全員を解放してあげる」

——ぎゅむむっ！

敏感な裏側を責められたペニスが、持ち主の意識がないにもかかわらずムクムクと膨れ上がり完全な勃起状態を形成した。包皮はずる剥けて、ヒクつく先端からは透明の露まで垂らしている。

く。それに対しソニアは震える心許ない声音で、弱々しく反論をするのがやつとだ。

——ぎゅるるるる……。

「お、お腹アッ……んくうううううっ！」

腸内粘膜より吸収された怪人の白濁液に、またしても戦士の胃が激しい拒絶反応を示した。なのに肉体は貪欲に牡の体液を欲して、尻穴を無意識に収縮させる。キリキリと鳴る下腹に手を伸ばすことも叶わず脂汗をかけた背筋を痙攣させ、耐え忍ぶ。

「いいザマだっ。この淫乱牝豚が。今のテメエは、最高にそそる顔してるぜエ……ッ！」

その一部始終を見届けて最後の一滴までを注ぎ込み、怪人がようやく射精の収まった巨根を勢いよく一気に、溢れるほど注いだ精液の奏でる卑猥な音とともに引き抜いた。さらに怪人は馬面を余計に醜く歪め、金髪に乗せられたナースキャップで汚れた肉棒を拭く。思う存分キャップに肉幹を擦りつけ、さらりとした生地感触を堪能する怪人。当然汚濁の雫は、柔らかなウエービーヘアにも濃い糸を引いて垂れ下がった。

だが、ソニアにしてみればそれどころではない。

「あうっ……こ、零れちゃううっ……お尻から馬のザーメン垂れちゃううっ……」

咄嗟に肛門を引き締めようとすが、存在感を示していた巨大生殖器を失い、無残にも拡張されてぽっかり口を開けたアナルはすぐには閉じてはくれなかった。

(このままじゃ快ちゃんに……ッ)

高く掲げられたままのソニアの尻の真下には、未だに泣きじゃくっている童顔が身じろ

ぎ一つできずに押さえつけられている。このまま力を抜いて尻穴を緩めれば、間違いなく快の顔面に汚液をぶちまけてしまうことになる。

「だ、だめえっ……で、できないっ」

——他人の精液でペットの顔を汚す。平常のソニアなら魅力的に感じた事柄も、今は許されざる禁忌となつて淫乱戦士の心を苦しめる。

「我慢しないでいいんだぜエ。ほれ、ブリッとやっちまえやあつ！」

「お腹押さないでえっ……我慢できないっ……。出ちゃう、ホントに汚いの出るうっ！」

イヤらしくニヤつきながら触手で腹を押してくる怪人に恥じらう顔を散々覗き込まれながら、懸命に腹痛と便意をこらえた。だが。

「ヒヒッ。手伝つてやるよ。オレのザーメンがしつかり吸収されたかどうか確認しなきゃならねえし……なあッツツ！」

「ひいひいひいひいひいひいッ！　ンンあああああッ！」

怪人の意のままに動く手足の如き繊毛触手が、金色の茂みから顔を出した肉色の宝珠へと殺到する。健気に包皮を剥いてぷっくりと膨れたその肉芽に一齐に群がり、我先にと撫でられ、嘔みつかれ、吸いたてられた。それでも下腹に、倒れそうになる足に力を入れて懸命に排泄欲求をこらえる。

「フンッ、そんなに出したくねえのなら蓋をしてやる」

——ジュチュウッ！　ヂュボオオッ！

「あいいいッ！　だ、ダメええええええッ……ひぐうっ……ぐうひいいいッッ！」
数本の触手が緊張する蕾の中へと押し入ってきた。膣口と連動し、閉じられた肛門が内側のピンク色の粘膜を覗かせる。

——びゅ……ううっ。

隙間から少量漏れ出る濁液を、快の顔にかからないよう腰を振って飛ばす。怪人の足元へと飛んだ汚濁は丁度遮る形となった触手へとかかり、ヌラつく表皮をさらに湿らせた。

「クヒッ、ホカホカと温まってやがる……」

濡れた触手を口元へとやり、ぴちゃぴちゃと音を立てて舐めしやぶる馬面怪人。

「ううっ……この変質者、エロ怪人ッ……！」

恨み言はいとも簡単にかわされ、怪人は下卑た笑みを女戦士に向けた。

「こんなだらしねえケツには、もつと太い栓が必要だなあッ」

そう宣告する馬面怪人の股座で凶暴な肉の凶器がウネウネと薄気味悪く蠢くのを、ソニアは絶望と羨望の入り交じった複雑な表情で、ただただ目を離せずに見つめ続けていた。

「ヒハアッ、挿^はつていくぜえ。一本、二本、三本つと……ヒヒッ、余裕じやねえかよ！」
「ひぎいひぎ……つつっ……く、来るな、もう入ってこないでえええ——ッ！」

再度窮屈な肉穴へと侵入を果たした触手は温かな肉の感触に悦び、我先にと潤みきった柔らかな腸壁に吸いついた。繊毛を駆使して嘔みつくような強烈な吸引を行う。

(奥まで触手みっちり埋まってるううううううっ！)

はだけた胸と桃色の白衣は触手の粘液でベットリと汚され、布切れは肌に貼りついて着心地は最低だった。触手の押し込みに身体が揺れるたび、ペチヨペチヨの汁が肌に染み出してきてしまう。

「うはあつ、ああ……ソニアさあん」

強引に尻穴へ押し入れられたソニアの呻きに、快の嬌声が重なる。彼は未だに囚われたまま、ソニアの股下でその包茎ペニスを無数の触手に弄ばれていた。

少年のすがるような、けれどはつきりと情欲に染まった顔が、淫蜜と汚濁に汚れながらソニアの痴態に見入っている。

「はぐつ、ううううつ、お腹の中でウネウネ動いてえつ……！」

馬面怪人の触手たちは腸内で絡まりあい、互いを包むように巻きついていく。乳白色の長細い粘性触手たちが、ソニアの腸内でグロテスクな表皮の巨大肉棒へと変貌を遂げる。

「はひいひいっ……もう入らなっ……もごおおんんッ！」

腸内で触手群に蠢かれ、苦悶の表情を浮かべるソニアの口腔に余っていた触手群が押し込まれた。快もまた包茎からのヌルつく刺激に晒され、紅潮した頬と唇を震わせている。

ただ一人、馬面怪人だけがイヤらしい下卑た笑みを浮かべて支配の悦びに浸っていた。「ヒヒッ、ケツには存外入らなかつたな」

ソニアの肛門には計九本の触手が押し込まれ、内部で巨大な肉棒を形成している。その

長さは十メートル以上にも及び、また触手ゆえに硬軟が自在だった。その特性を存分に活かし、触手ペニスは腸を逆流するように奥へ奥へと入り込んでいく。

「えぶうううっ！ んぐっ……んええええっ！ うぐうんッ！」

囚らずも一度精エネルギーを受けたことで、活性化して過敏に研ぎ澄まされた人造戦士の快楽中枢が、刺激を片っ端から快感に変化させ始めていた。怪人に貫かれ腹の奥まで挿入されているという事実も、精神を揺さぶり淫欲をさらに駆り立てる。

「……つぶあ！ んはああつ……！ も、もつとおっ！ もつと強く擦つてえっ！ お願
いよおッ快……ちやあんっ！」

触手を懸命に吐き出し、とうとう唇からおねだりの言葉までが飛び出した。だが口を突いたのは怪人の名ではなく、愛するペットの名前。その視線もまた囚われの少年の視線と絡まり、見つめあっていた。

「勝手に吐き出すんじゃないよッ！」

「んぶぶううう……ッ！ んぢゆうっ！ はぶっ！ んあああああっ！」

再度口腔を割った触手に喉奥を突かれ、くぐもった声とともに二穴が同時に引き締まる。
（口の中、生臭くて……粘っこいお汁で一杯になってる……）

触手の吐き出す粘性体液は、快楽に呆けたソニアのなけなしの判断力を根こそぎ奪っていく。いつの間にか腸内のもと同じように巨大な肉棒を模した幾本もの触手。その先端で代わる代わるに喉の奥を突かれるたび、背筋に電流が奔った。

(ああ……あたし濡れて……お尻の穴こんなに濡れてきちゃってるぅ……)

腸を逆流する触手と擦れてジュブジュブと泡立つ粘液の音を、彼女は確かに耳にした。媚粘膜が溢れさせた腸液が、時折触手の先端に吸られながら下品な音を響かせている。

——ズルンッ！

「んんぶうううっ!!」

「クヒヒッ、とうとう行きつく所まで入っちゃまったよ」

少し離れた位置に立つ怪人が心地よさげに腰を震わせ、下卑た笑いを聞かせてくる。

これまで腸粘膜で感じていた触手先端の繊毛部分。巨大な刷毛で撫でられるようなもどかしい疼きも、強力な吸引も今は感じられない。大腸を、さらに細くうねった小腸までも駆け抜けた触手ペニスは、とうとう胃にまで達してしまったのだ。

(お腹の中……入ってえっ……！ 串刺しにされちゃってるぅ……！)

通常なら狂いかねない異常挿入も、今やソニアにとっては快楽へとすり替わり自身を悦ばせてくれる刺激の一つに過ぎない。その証拠に同様に触手ペニスを咥え込んだ口腔からはだらしなく涎を零し、唯一触手が密着していない腔口周辺では、溢れた淫蜜が陰毛を濡らし、ぺつとりと陰唇に貼りついていた。

「んぢゅぢゅりゅううう！ はむう、えうううううっ！ んぶう、んふううっ……」

鼻で荒く息をしながら、懸命に口内の触手へと舌を絡める。さらなる快楽を得るために、できることはなんでもするつもりだった。生臭い汁を吐き散らかされれば喉を鳴らして飲

み下し、喉奥を突かれれば唇を窄めて幹を締めつけてやる。

腸を貫通した肉棒に対しても、肛門の締めつけと腸液の分泌による摩擦の和らげで、できうる限りの刺激を与えてやる。

淫蕩に染まった顔に理性の色はなく、ただただ快楽に追従する獣の表情がそこには浮かんでいた。

「ソニアさ……ご、ごめんなさいっ。ボ、ボクもおっ……!!」

陶然と移ろう意識の最中で、女戦士が見つめる先。

自ら震える腰を懸命に触手に押しつけ、少年が甘い声を張り上げていた。彼もまた触手のねちっこい責めによって快楽に呑み込まれ、顔を甘く蕩けさせている。

（ああ、快ちゃんのドリルちゃん、イキそうになってるの？ あたしもオ……ッ！ あたしもウネウネに犯されて気持ちいいのよオ？）

絶頂の予兆を告げる少年の荒い吐息と熱の籠った視線を股間に感じながら、囚われの包茎ペニスを見つめる。

それだけで腸内粘膜はさらに潤み、新たな触手の侵入を可能にした。生み出されたわずかな隙間を巡って、獲物にありつけないでいた触手群が肛門へ我先にと殺到する。

「ヒヒッ。十本、十一本目が入るかあ？ くふうッ！」

「じゅぽぽっ！ じゅるっ！ んはっ、あむうっ！ ちゅぢゅぢゅうううッッ！」

押し込まれる触手の数が増えるたび、増幅される圧迫感にソニアが感極まった表情を浮

かべて身体を震わせる。声にならぬ声を上げる代わりに、喉を犯す触手群への奉仕に一層熱を籠らせた。

「もうっ……出るっ……出ちゃうっ！ ……くひひひひひッ!?」

「短小のうえに早漏か、情けねえガキだ。——勝手にイカせるもんかよ」

——ギユチッ！ ギチチィィィッ！

「ひゃぐうううっ……!?」

こらえきれずに射精をしようとしていた快の包莖が、絡まる触手によってきつく絞り上げられる。主人の許しなくペットである彼が達することは、許されていない。たとえ主人が入れ替わったとしてもそれは絶対の理であった。

「んふー、ふう、んふう……はむうん……」

「おめえも……まだまだ終わりじゃねえぜえ？」

口淫奉仕に没頭するソニアに、馬面怪人は冷酷な声で通告する。同時に、口腔に入り込んだ触手群までもが、喉奥へと侵入を開始した。

——ずるっ、ずりゆりゆううっ！

「ぐぶぶううっ！ ひはあああ……ひやめえっ、はいつひや……んごおオオオッッ！」

気管を通り、食道を下って触手が喉内部を滑り落ちていく。道すがらに粘液を吐き出して、巧妙に人造戦士の性感を高めさせながら。

「ちゃあんと触手のザーメンにもエネルギー効果はあるからよ。その点だけは安心してい

いぜ？ はしたなく零さないよう、胃袋の中へ直接流し込んでやらあッ！」

異常な興奮と支配欲に取りつかれ、瞳には明らかな狂気を宿らせて怪人が叫ぶ。

（お腹の中へ直接……？ そうしたら、もつと気持ちよくなれるのね……？）

快樂漬けの頭の中で、ぼんやりとソニアはそんなことを考える。頭を巡らせようとしても思い浮かぶのは、気持ちよくなれるためにどうすればいいのか、ということだけだ。

暴れまわる触手の粘液でドロドロになった胃がかと熱くなり、その熱が体内で伝染していく。圧迫され拡張される腸内も、擦りあわされる腿の内側で物欲しげに涎を零す腔内も、胃内部で粘性の汁を吐き出されるたび、同様に熱く火照って官能を高めていった。

「ふゥン……んじゅっ、じゅぶぶっ、ちゅぶううッ！」

「クッ、気分出してきやがって。……待ってろ。じき一斉にぶちまけてやるからなッ！」

宣告した触手の動きが一層激しく、強引なものへと変わる。異なる穴から入り、胃袋で邂逅を果たした触手群が、好き勝手な動きを展開し始めた。腸内部で胴体を腸壁に擦りつけながら前後させるもの、気道に吸いつき繊毛で撫でるもの、己の体液をあちこちに塗りとくもの、ひたすらに奥を小突くもの――。

独り善がりて身勝手な動きで粘膜をゴリゴリ擦り上げられてさえ、喉を開き、肛門を締める。精を欲する肉体はどこかしこも歡喜の応対で迎え入れた。

「ううんっ、んぐううっ！ かふっ、んんんぐううッ！ ぐむううんんんッ！」

もはや一片の苦痛も感じられない。膨大な快樂に心をぐずぐずに溶かされて。ソニアは



「んぶあつ……ひくあああああつ！ んあおおおおッ！ はあんうううッッッ！」

強引に破られたシヨックで痙攣する腸内を、蘭が激しい動きで往復する。処女穴に行く動きでは到底ない無謀な抽送にも、開発されきった戦士の肉体は柔軟に対応してしまう。ほんの少しの痛苦よりも、膨大に与えられる快楽のほうは何倍も強烈だった。

「ふあ、ん……んんっ、んっ、んっ、んうんっ！ ぬ、抜いてえっ……」

腕の中の崇文を案ずる気持ちはあるが、身体に余裕がなかった。背後からの振動に押し出されるがままに、腰を揺すりたててしまう。

「ほおら、自分ばかり腰を振っていないで……。坊やのアヌスもしっかり犯してあげなさいな。ザーメン出さなくちゃいけないのでしょうか？」

ニイッと女科学者が笑んだのは優しさからなどでは決してない。面白いものが見れる。ただそういった己の興味に基づいての、利己的で凶悪な笑みだった。

「ひううっ……崇文君のお尻に、おちんちんが……。ああ、お尻の穴熱いのおっ……」

肛門で感じる蘭の肉棒の熱さと、自身の肉棒で感じる崇文の腸内のぬめり。力づくで犯される被虐と、思う様犯す充足感とが交錯し、巫女戦士の心をじわりと侵食していく。

「き、よね……さ……ううっ、ううううっ」

少年は時折恋人の名を呻くほかは、未だ虚ろな表情で為すがままにされていた。ほんのりと頬が赤く染まっているのは、果たして痛苦からか、それとも快楽からなのか。

平素の生気に満ちた表情とはかけ離れた少年の表情に罪悪感を感じながら、けれども清

音の牡器官は確実に征服の悦びに浸っていた。

(ごめんなさい……ごめんなさい、崇文君……！)

自身も尻穴を犯されながら、胸中で懺悔して清音が腰を振るう。鼻先に感じる怪人たちの異臭が、清音の情欲にさらに拍車をかけた。

——シュッシュッ……。

「オオオ……メスウ……。メス犬にぶつかケエ……ッ！」

「ブヒッ！ ブフヒヒイイッ！ ぶつかケるウッ……！」

尻穴に巨大な肉棒を押し込まれ葛藤する女戦士をあざ笑うように、檻を形成する馴染みの顔が下卑た笑みを零しながら各々の肉棒を抜く。皆一様に、ここ数日で覚えた牝を白濁の汁で汚す行為にすっかり夢中になっていた。

「ゲゲッ、すべスベのスぱッツう……！」

「おデはこのキレーな羽だアッ」

蛙怪人はスパッツの太腿部分に、牛面怪人は背中できびく羽に。それぞれがお気に入りの部位に悪臭漂う肉棒を擦りつけ、先走り汁で自らのテリトリーをマーキングしていく。

「フフ、もうみんな吐き出したくて堪らないようね。くっさくて濃いザーメン、また頭の上からひっかけられちゃうわよ、清音ちゃん？」

全身のほぼすべてで感じる牝どもの肉棒の硬さと震え具合から、確実にその時が近づいているのが感じ取れる。微笑む蘭の言葉が、まるで死刑宣告のように心の中でこだました。

「いや……もう、もう精液は嫌なのおっ……お願いだからあ……ッ」

また汚濁まみれにされる。しかも、今度は崇文の目の前で。隷属と被虐の悦びを植えつけられた巫女戦士はそれを夢想して身を震わせた。

股間の牡性器も敏感に持ち主の快感を感じ取り、ますます大きく膨らみ硬直する。怪人たちの放つ濃縮した牡の香りに喘ぐ清音自身のアナルもまた、きゆうきゆうときつく断続的に収縮し、母の肉棒を刺激していた。

「あっ、ひィ……ンンン！ 崇文くうんっ。私、お尻の穴で気持ちよくなってるう！」

「アラ、駄目よお。自分ばかり気持ちよくなってるないで、ちゃんと突いてあげなきゃ。こんな風に……ネッ！」

——ずぢゅううううううッ！

「ひぐううううううううッ！ あっ、あふうううッ……そこおっ、いいイッ！」

蘭が清音の肛門を思いきり突き上げて、次なる行動を急かしてきた。娘に身体をもって技巧を教え込もうと、巧みな腰使いでほぐれた腸粘膜を責めたててくる。

硬く尖った先端で腸壁を突かれると、清音の腰も前へと押されてしまう。蘭が腰を振れば、自然と崇文を責めることに繋がってしまうのだ。尻穴で繋がった三人の身体。その主導権のすべては最後尾の女科学者が握っていた。

「ほら、ほらほら。ほら！」

蘭が激しく清音を突けば、

「あうっ、うんっ！ うくうっ！ んんっ、んんんうううッ！」

快楽に押し出された清音の腰が、崇文の狭い穴を拡張しつつ掘り進む。

「いあああつ……あああッッッ！」

部屋には牝の嬌声が二つと、ただ一人の牡の悲鳴とが共鳴し、混ざりあっていた。

「んひいっ！ いいイイ……ッ、崇文君のお尻、おちんちんに絡んでくるのお！」

上半身を、力なく脱力した少年の背に乗せて熱っぽく吐息を漏らす。行き場を求めるように宙に垂れた掌に、生温かい雫が落ちた。指の間でニチャニチャと粘るソレを確認してみれば、鼻を突く、痺れるような独自の匂い。犯されているはずの崇文の肉棒が吐き出した、先走りの雫だった。掌に当たる硬直具合から、彼も勃起しているのだと分かる。

（お尻を犯されているのに。意識だつて朦朧としているのに、興奮しているの？ 崇文君）

背中にもたれかからせた顔を少し捻れば、崇文の表情を確認することもできる。けれどもし彼までが快楽に吞まれていたら、そう思うと恐ろしくて見ることができなかつた。

「もっと突いてあげないと可哀想よ。なんだつて清音ちゃんの恋人は、アナルにちんぽぶち込まれて勃起しちゃうような変態さんなんですよ」

清音を快楽の渦に突き落とすように、蘭が白衣をなびかせてグイグイと腰を突き入れてくる。その都度、清音と崇文の甘い嬌声が狭い部屋で反響しあい、お互いの耳にはつきりと届いて羞恥を煽っていった。

「くうあああつ……！ ふあ、あつああああ……ッ！」

キョンキョンと締めつけてくる年若き少年の括約筋。慣れない男性器から絶えず送られてくる強烈な排泄欲求に、清音はなりふり構わず黒髪を振り乱して悶える。だが……。

「ど、どうしてえっ！ おちんちん、もうビクビクきてるのにいっ……！」

少年のアナルの締まりに、すぐにでも射精してしまうかと思われた。肉棒は精を吐き出そうと確かに震えているのだ。それなのにまるでなにかリミッターがかかったかのように、どうしてももう一段上の高みへと至ることができないでいた。

「言ったでしょう。……『突っ込んで』って言わないと、貴方はイケないの」

不敵に笑い、ドクター蘭が愛娘の尻穴を淫猥に膨らんだ亀頭で抉った。強烈な快楽を肛門から受けてもなお、清音の肉体は絶頂に至れない。

「あひィッ、はぐううっ……！ な、なにをしたのお……ッ！」

明らかにおかしい肉体の異変に、不穏な感情が胸の内に生じる。また、女科学者の手によつて肉体を造り替えられてしまったのではないか。そう危惧するのは当然のことだ。

案の定、女科学者は娘の足に残ったスパッツ生地を撫で擦りながらその高い知能と技術の一端を語り聞かせる。

「簡単よ。オマ○コにちんぽが入らないと絶対にイクことができない。そう暗示をかけただけ。フフ、私は清音ちゃんのお尻に入ってるし、坊やのモノを入れるのも無理よね」

残るは周りを取り囲む怪人どもの、醜悪な肉棒だけ――。

母の意図を汲み取り、清音の表情が絶望に曇った。けれど崇文の温かい腸内で、確実に

快感は蓄積されて戦士の心と身体を蝕んでくる。もう一時も我慢できそうにはなかった。(言いたくないっ……。崇文君の前でっ……。おねだりなんてしたくないのにいいッ！)

「おねだりしなければ、ずうーっとこのままよオ？」

快楽に抗う娘の腸内をしこたま擦り上げ、耳元でパープルージュが囁いた。繰り返し何度も腰を押しつけ、狭洞を拡張しようと縦横無尽に揺する。押し出される清音の肉棒が少年の腸粘膜と摩擦しあい、さらなるもどかしい疼きを腰骨の辺りにもたらしてきた。

「やああッ！ あおおおッ！ イケないッ！ イキたいのに、出したいのにイッ……。！」

狂おしいほどのもどかしさ。愛する少年と繋がっていながら、自分だけが達することを許されないのだ。やがて、清音の頭の中はある思いだけで一杯になっていった。

(出したいっ、崇文君のお尻で精子出したいッ！)

無限に続く責めに快楽に対するなけなしの耐性が磨耗し、擦り切れて消え失せる。次の瞬間、巫女戦士の唇がとうとう禁断の台詞を口にした。

「ぶつとい、おちんぼ……。ハメてえっ！ 誰のでもいいからあつ。大きいオマ○コの穴に挿れてよおおおおオオオッ!!」

「フフッ、よく言えました」

娘の懇願を受け、女科学者の合図が送られる。肉の壁を為す怪人の一体、緑色の体表をした蛙怪人がイボだらけの勃起をこれ見よがしに清音の眼前で振る。そうしてベッドの上へ無造作にごろんと寝転がった。

「ほら、坊やを抱えて……そう、貴方が自分で緑のおちんぼをオマ○コに啜え込むの」

言われるがまま腕の中の崇文を背中越しに抱え、尻で蘭の勃起を啜えたまま半身を起き上がらせる。そして徐々にベッドの前方へ、待ち構える蛙怪人の股間へと近づいていく。

「一気に根元まで啜えなさい」

くちゆり、と濡れそぼる入り口に醜悪な肉棒が接着する。そして、言いつけどおりに腰を一気に落とした。

「はっひいひいひいひいっ！ あひやあうう！ しゅご、ひいひいひいひいッッッ！」

——びゆりゆうううっ！ びゅぽぽぽぽぽぽッ！ ぶぢゆりゆうううううーッ！

「はぐううううッ、ああああアアッ！ 出るッ、崇文君の中に出てるううッッッ！」

「……くふううう……うううううう——っ……」

蛙怪人の上に腰を落とした瞬間、虚ろに喘ぐ崇文の腸内へと大量の精をしぶかせる。溜まりに溜まった濃厚な白濁が次々と腰の震えに伴って少年の粘膜内に打ち出された。

清音が未知の快楽に白目を剥いて激しく達し、肛門で熱い奔流を受け止めた崇文が細かい声を震わせる。清音の腰が跳ねれば連動して崇文の腰も跳ね、清音が精を恋人の尻穴に注ぐそのたびに、崇文は肉棒から白い飛沫を噴き上げてシートに斑点状のシミを作った。

「アハハハハ！ 仲よしさんねエ貴方たち。イク時まで一緒だなんて……。二人とも情けないアクメ顔晒して……フフ、本当に最高のコンビだこと！」

「あひゅうっ……止まらない。せーしがあっ、ぶびゅびゅーって止まらないのおっ！」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル！



サイズ:文庫

二次元
ドリーム文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！



※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

サイズ:新書

二次元
ドリームノベルズ

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！



サイズ:文庫

リアルドリーム文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！



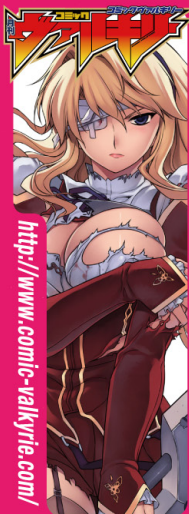
サイズ:文庫

あとみっく文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！ <http://ktcom.jp/> 検索

Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



KTCの戦うヒロインオンライン漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!



二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!



二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!



二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!